

湖南省社会教育委员会議

審 議 報 告 書

平成 20 年(2008 年) 3 月

目 次

1. はじめに
2. 就園前の子どもの育ちと親のかかわり
3. まとめ
4. あとがき
5. 平成 19 年(2007 年)度社会教育委員会議 会議経過
6. 平成 19 年(2007 年)度社会教育委員名簿

1. はじめに

平成19年(2007年)10月、大津市で母親が生後10ヶ月の我が子をマンションから投げ落とすという痛ましい事件がありました。長浜市での幼稚園児殺害事件も記憶に新しく、滋賀県のみならず全国のどこかの町で、毎日のように児童虐待や親の子ども殺害、子どもの親・きょうだい殺害などの事件がメディアで報じられています。

他方、子どもの周りでいじめや不登校などさまざまな社会問題が起きており、事象が深刻化しています。これらは、子どもたちが全身全霊をかけて、大人に、社会に投げかけているSOSだといえるでしょう。このことに私たちがどのように応えていくのかということが課題でもあります。

人は、生まれたその瞬間から周囲とのかかわりを求めながら生きています。人は生きていく上で必要な心理機能や知識、技能の多くを人とのかかわりを通して身につけていきますが、家庭はその最も基本となる育ちの場です。大家族や地域のつながりの中で子育てが行われていた頃に比べると、核家族で子育てをすることが増えた昨今、特に就園前の乳幼児を育てるにあたって、孤独感にさいなまれる親が多いといわれています。他方、子どもに恵まれたにもかかわらず、育てる意識を持たずに育児放棄する親もいます。また、社会情勢の背景もあいまって、「しっかり育てなければ」という過剰な責任が親に課せられる一方、時間的・精神的余裕がないために、育児が息苦しいものになっている親の存在もあります。

湖南省においては、子育て支援センターも設置され、子育て相談や子育てサークルなど、以前に比べれば子育て中の親子が集う場所や機会は増えました。さらに、子育てに関する情報もインターネットなどを通じて気軽に知ることができるようになっていきます。親が育児を楽しみ、子どもが健やかに成長するためには、子育てに関する情報をうまく利用・活用することも大事ですが、親もまた子育てを通して人とのかかわりの中で生きていくことが大切です。だからこそ今後も家族や地域からの協力などさまざまな支援が必要と考えられます。

今、子どもたちが小中学生になってから、いじめや不登校などの問題が顕在化しています。湖南省社会教育委員会では、「まち全体で子どもを育てる環境づくり」のテーマのもと、問題が顕在化する以前の段階、すなわち、人としての心の土台が作られる「就園前の子どもの育ちと親のかかわり」に特に着目して審議を重ねてきました。このたび、これらの審議の結果をまとめましたのでここに報告いたします。

平成20年(2008年)3月10日

河 野 由 子

2. 就園前の子どもの育ちと親のかかわり

人は、生まれたその瞬間から周囲とのかかわりを求めながら生きています。そして、自分の周りの人々とのかかわりをそれぞれの発達段階に応じて体験することによって、社会規範や習慣、価値観、情感などを理解し、それらを自分自身の内に取り込んで自我を形成していきます。

赤ちゃんは、生まれながらに持つ能力を人と関わることや五感を発達させることで伸ばし、しっかりとした心の土台を築いていくことができます。乳幼児期の子育ては、将来への人間関係の基礎をつくる時期だからこそ重要です。

子どもの育ちに大切なこと

1. 「ことば」は、人とのかかわりの場があって発達します。

赤ちゃんが生まれた瞬間から持っている能力に「泣く」という行為があります。「泣く」という能力を手段として、自分の要求や欲求を身体全体で表現します。そして、赤ちゃんに関わる親が、この要求や欲求に応え、不快を快に変えることで、赤ちゃんは安心・安らぎを感じます。この親とのかかわりが、ありのままの自分を大事にしてもらっていること→大事にされている自分を好きになる心→もっと人と関わりたいという気持ちをもつこと→人への信頼感を育むことへとつながります。人とのかかわり(コミュニケーション)の原点がここにあります。

近年、サイレント・ベビーが増えているといわれています。サイレント・ベビーとは、母親と視線を合わせない、表情が乏しく、もの静かで、「泣く」ことが少ない、あまり「笑う」ことをしない子を示します。一見、手のかからない良い子に見えますが、赤ちゃんが泣かない、笑わないのは、自分の気持ちを表そうとしていない、周りの大人と関わろうとしていないためと考えられます。まだ「ことば」を話さない乳児は「泣く」ことによって自分の要求や欲求を伝えようとしますが、親がそのことを受け止めずに育ててしまうと、赤ちゃんはやがて「泣く」ことや「笑う」ことをやめ、人と関わろうとすることをあきらめてしまいます。

だからこそ、赤ちゃんを抱っこしたり、おむつを替えたり、母乳やミルクを与えるとき、また、機嫌よく赤ちゃんが声を出しているとき等のことばがけは大事です。この働きかけが赤ちゃんに安心感を与えつつ、親のことばを聞く耳や心を育てます。ことばがけやスキンシップなどの刺激が少ない親子関係では、赤ちゃんは心を閉ざされたまま成長してしまいます。すると、信頼関係が築けない、他人とのかかわりがうまくとれないなど、情緒的、社会的行動(ひきこもりなど)の異常となって現れてくることもあるのです。常に語りかけ、微笑みかけてくれる親の働きかけは、子どもが成長してもっと広い外の世界へとかかわりの対象が広がっても、コミュニケーションの基本姿勢として子どもの中に生き続けると考えられます。

例1 紙おむつの出現

布おむつの頃は、赤ちゃんが「泣く」ということを通して「気持ち悪いよ！」というメッセージを伝えます。それに対し、親が「よしよし」、「気持ち悪かったね、きれいにしようね」、「ほら、すっきりしたね」、「良かったね」などことばがけをして応えていました。おむつを替えるにしても、こうしたことばがけをしていくことで、赤ちゃんは「濡れた」という感覚と「気持ちが悪い」ということを認識することができます。また、乾いたおむつに替えることによって「気持ちが良い」という五感が養われます。さらに、「気持ち良くなったんだ」という「ことば」とそれを認識する力が備わってきます。

紙おむつは、とても便利なアイテムですが、反面、おむつ替えの回数が減ったことで、ことばがけや人とのかかわりの回数が減ってきました。たとえ、便利なものが次々出てきたとしても、親や大人の都合ではなく、赤ちゃんの状態をしっかりと見て関わる姿勢を大事にしたいものです。

例2 メディアの落とし穴

新聞・雑誌・テレビ・ラジオをはじめ、ビデオやDVD、コンピュータゲームやテレビゲーム、インターネットや携帯電話などの普及によって、幼い頃からメディアに接する時間が多くなりました。子どもが好む映像を見せるなど、メディアに子守りを任せていれば親は楽ですが、このことは必然的に人とのかかわりや、自然との直接的なかかわりの時間を少なくしています。

一方、子どもに関わる大人自身も授乳中に携帯電話でメールをしたり、メディアに集中している親も増えているといわれています。子どもの育ちを考えると、子どもと接する場合は、じっくりと子どもの要求・欲求に向き合いながら、同じ時間を過ごすという姿勢を親や大人は持ちたいものです。

例3 伝承あそび・わらべうたで子育てを

乳幼児期の子どもは、家族の語りかけや伝承あそび、わらべうた、子守歌などのふれあいから「ことば」の獲得を始めます。おむつを替えるとき、あやすとき、しかるとき…生まれた時から「目と目を合わせる」ことが重要といわれている「わらべうた」の中には、人として楽しく生きていく知恵がたくさんつまっています。大人が赤ちゃんに生の声で「ことば」を届け・あやすと、それを見て赤ちゃんは笑います。そんな子どもの姿に大人もまた幸せな気持ちになります。

便利なグッズやおもちゃなど、消費者の心をついた商品は数多くありますが、お金をかけなくてもことばのあそびでも「こんなに楽しく子育てができるんだ」という気持ちにさせてくれる伝承あそびやわらべうた…。昔から伝えられてきた先人の知恵を今の時代だからこそ大切に語り伝えたいものです。

例4 「絵本」や「おはなし」を楽しもう

乳幼児期からの「おはなし」や「絵本」の読み聞かせは、聞くことによる「ことば」の体験です。CD、テープ、ビデオの機械等からではなく、子どもの周りにいる大人の生の声で届けることにより、物語の楽しさや「ことば」の響き、リズムをよりストレートに手渡すことができます。このような体験から生まれる楽しさや喜びと安らぎは、自分は大切にされている、愛されているという自己肯定感や自尊感情が育つことにもつながります。それは、子どもの自信につながり、自立へのきっかけにもなります。自分を大事にする気持ち、共感する心が育つように、乳幼児期には、「絵本」や「おはなし」を親子で十分楽しみたいものです。

2. 「五感」は、体験の場によって発達します。

子どもの発達を植物の成長にたとえるとき、親は「早くきれいな花を咲かせよう、大きな実をつけさせよう」と意気込みがちになります。しかし、乳幼児期はこれから伸びていく「根っこ」をしっかりと大地に這わせる時期です。「根っこ」を伸ばすとは、視覚、聴覚、触覚、嗅覚、味覚の五感を発達させ、感性を豊かにすることです。五感から受け入れた感覚が、快と感じるか不快と感じるか、安心かそれとも不安なのか…そこに感性の力がありますし、人が生きていく上での大切な要素となります。

五感を発達させ、感性を豊かにするためには、人や自然と関わる機会を多く作ることが大事です。子どもたちは、体験を通してさまざまな事象の違いを肌で感じることができます。また、大地にしっかりとした「根」をはるためには、柔らかく、温かい、豊かな土が必要です。赤ちゃんの時から親や周囲の大人が語りかけ、身体をいっぱい使って自然と関わり、よく食べ、ぐっすり眠る…。この当たり前の日々の生活を保障していく努力を、私たち大人は社会全体の取り組みとして行っていかなければなりません。

例1 自然とのかかわり

最近、遠方の整備された公園や、イベントが催されている場所へ出かける人も多く見受けられます。しかし、かえって大人も子どもも疲れてしまうということも現実にはあるようです。湖南省にはまだまだ自然が残っています。豊かな自然環境があります。家のそばの生物に目を向けたり、樹木や草花に接したり、空を見上げるなど、五感をいっぱい使う体験は実は身近なところにこそたくさんあります。また、子どもとそういう体験をする時、子どもと感じたことを共感できる親や周囲の大人の存在が大事です。共感とは、さらに豊かな感性を育み、共感できる自分自身を大事に思えるという気持ちをさらに深める働きを持っているのです。

例2 食べることの大切さ

食事は、五感を最大限に使っている基本的な活動です。料理を目で見て、匂いをかぎ、素材の感触や風味を味わい、噛みながら音を聞く…。家族の語りの中で食事をとると、おいしさや楽しさを共感することができ、自分はひとりじゃないという安心も得ることができます。

ところが、親がテレビを見ながら、また、携帯電話を使いながら授乳すると、赤ちゃんは、親が向けるまなざしや語りを感じることはできません。また、自ら食事をとれるまで成長した子どもでも、テレビやビデオを見ながら食べていると、画面や音の刺激に引き込まれ、五感を発揮することができなくなります。たとえ家族と同じ食卓を囲んでいても家族との会話は深まらず、共感することができず、同じ時間同じ場にいるだけになってしまいます。

食べるという行為は生きる基本のひとつです。五感を育てる大きなチャンスが無駄にしないためにも、授乳時は赤ちゃんの目や様子を見ながら母乳やミルクを与えることに専念する、食事中はテレビを消すなど環境を整えることが必要です。

子育ての重要な5つのポイント

一昔前の子どもたちは、家庭で基本的なしつけをされる一方、地域の人や自然からいろんな力ももらって育ってきました。ところが、核家族化が進んだ現代社会では、地域のつながりが希薄になりがちで、子育てへの不安や重圧を感じる親が増えています。その原因としては、

- ・ 母親が孤立し、悩みを話す相手がいない
- ・ 子どもに対して過保護・過干渉しがちになる
- ・ 親から自立できないまま、育児のノウハウを身につけないまま親になる
- ・ 母性神話・3歳児神話など氾濫する情報に縛られる

などが考えられます。それを解消しようと、育児書や雑誌、インターネット上の情報に頼りがちになる親も増えているといわれています。

「まち全体で子どもを育てる環境づくり」というテーマで審議を重ねてきた中で、子どもに関わる社会問題が生じてくる要因を考えたとき、人格形成の基本となる就園前の子どもの育ちに大切なものは何か、親はどう関わるべきかを十分理解した上で、どう支援していくかを考えることが大事だということになりました。そして、就園前の子どもとその親にとって最も大切なことを5つのポイントにまとめてみました。

●「愛されている実感」を伝える子育てを

乳児期から人と関わる子育ての積み重ねにより、親子関係・愛着関係は育まれていき、親は親として成長し、子は「愛されている実感」を感じ成長していく。その経験は、必ず次世代にも受け継がれていく。しっかりと目をみつめて優しいことば

がけをしながら、母乳やミルクを与え、おむつを替え、だっこする…。その積み重ねが自己肯定感・自尊感情を育てるということを親や周囲の大人が自覚することが必要です。

● 「甘え」をしっかりと受け止める子育てを

甘えていい時期に十分甘えた子はしっかり自立するといわれています。乳幼児期の子どもの要求・欲求表現である「甘え」を受け入れることは、子どもの心の中に生じている心の不安・揺れを癒し、人に対する信頼感を深めていくためにとっても大切です。「甘え」の足りない子どもは学齢期以降にさまざまな問題を起こすケースが多いと指摘されています。

また、子どもが自立への階段を上り始めると、親は「待つ」ということと「けじめ」をつけるということが必要になってきます。1歳半を過ぎた頃からの幼児は、「自分でやってみよう」という意欲を持ち始めます。そんなとき、親が手を出しすぎたり、他のことでごまかしたりすると、それは「甘え」ではなく、過保護や過干渉による「甘やかし」となります。親や周囲の大人はその違いを見極めることが必要です。

● 「遊び」を大切にすると子育てを

親とのやりとり、ひとり遊び、友達との遊び…。すべてが子どもの育ちでは欠かすことのできない大切なものです。「遊び」は生産性があり、創造的で、発達に不可欠な要素です。子どもは、「遊び」を通してルール必要性を知り、理解し、守ることを学びます。人と関わってうまく生きていくことの知恵が「遊び」にはつまっているのです。自分に目を向けるとともに、他人へも目を向けられること、いかによく遊んだかという共感や共生の体験が多いほど、ひきこもりやいじめを遠ざけるといわれています。

テレビやビデオ、DVDなどに任せた子育ては、共感や共生を得る体験のあそびにはなり得ないことを、親や周囲の大人が理解していることが必要です。

● 子どもの立場に立った、身近な環境を整えていく子育てを

たとえば、今聴いている音楽、流れているテレビ、部屋の明るさ、与えているおもちゃは、「人とかかわる力を育てる」子育てを阻害するものになっていないでしょうか。人は自分の周囲からの刺激を受けて成長し、適応的に行動することを学びます。

大人の都合が優先された日常生活になっていないかを確認し、子どもの立場、目線で身近な環境から整えていき、子どもが安心して暮らせるよう親や周囲の大人が配慮していく必要があります。そのためには、配慮の内容そのものを知識として理解し、大人自身が気持ちにゆとりを持つことが大事です。

●社会・地域の人たちと子育てを

現代の社会構造や社会情勢の中での子育ては難しいと感じる人は多いと思われま
す。しかし、こんな時代だからこそ、親が人とのかかわりをもたず、家の中で赤ち
ゃんと向き合っているだけの日々を過ごすのではなく、夫婦で語り合う、あるいは、
親自身も外に目を向け、人と触れ合う場や機会を多く持つことが大事です。そして、
さまざまな人たちと良い関係をつくりながら楽しく生活し、壁にぶつかった時には
知恵を出し合い、社会全体で子育てを支えていくことが求められます。

子育てはひとりで背負い込むのではなく、家族や近所・地域の人たちと一緒にな
って、子どもと関わるのが大切です。つまり、子育てをする親だけでなく、それ
を支援する側にいる人の存在が不可欠です。親とそれを支える周囲が、互いに対等
な関係の中で育ち合う仲間として、安心と安定を与え合っていくことが現代の子育
て事情の課題を解決する糸口になると考えられます。

3. まとめ

子育てについて問う時、「赤ちゃんにとってどういう親がいいのか、それを支える社会がどうあればいいのか」ということは、とりわけ少子化・核家族化している現代ではとても重要な問題です。特に、基本的な人格が形成される乳幼児期の子どもの育ちに、親や周囲の大人が「いかに関わるか」は重要なことです。親も子育てを通して成長していかなければなりません。育児は、親にとって自分育ちの体験でもあるのです。

私たち湖南省社会教育委員会議は、過去の子育てをただ賛美するものでもなく、現代の子育てを否定するものでもありません。ましてや、過度にプレッシャーのかかるような親像を求めるものでもありません。ただ、たとえどんなに時代が変わろうとも、“変わらないもの、確かなもの”が子育てにはあると考えています。特に、乳幼児期の子育てには…。そのあたりを明確に提示した上で、「就園前の子を持つ親の力、意識を高めるためには」というテーマについて議論を重ねてきました。そして、審議の結果、以下の二つの視点が大切であると考えました。

- ① さまざまな家庭状況の中でいかに親が自立し、自主的・自発的に子育てをしていくかということが大切で、それをどのように支えていくのかという視点。
- ② 子育てにおいては、子育て中の親と周囲の大人が日常の温かな付き合いを通して人間性を高めていくことが望ましいと考えられますが、そこをどう支援していくのかという視点。

子どもが地域社会の中で健やかに成長することを願い、親と子どもが互いにかけてえのない大事な存在として実感し合う幸せが、さまざまな家庭状況の中で子育てをするすべての親子に得られるものであってほしいと思います。

本会議の審議が、教育委員会から担当各部署に広がり、連携を取りながら有効に活用されることを願って、本会議の報告といたします。

4. あとがき

“子育て”について報告書をまとめることは、子どもというカテゴリーだけではなく、社会すべてにおいて、人間のより高次の幸せとは何かを考える作業だったように思います。さまざまな面でご協力いただいた皆様方に深く感謝申し上げます。

なお、この報告書作成は高谷忠彦前会長の社会教育への熱い期待による提案でした。多方面での活躍中、任期半ばで急逝されたことは惜しんでも余りあります。謹んで哀悼の意を捧げるとともに、多くの心を繋ぐまちづくりが進むことを願います。

5. 平成19年(2007年)度社会教育委員会議 会議経過

| 会 議 名 | 開 催 日 | 内 容 |
|-----------------|-----------|-------------------|
| 第1回湖南省社会教育委員会議 | 5月7日(月) | テーマ設定・討議(1) |
| 第2回湖南省社会教育委員会議 | 6月18日(月) | 話題提供(1)・討議(2) |
| 第3回湖南省社会教育委員会議 | 10月10日(水) | 討 議 (3) |
| 第 1 回 策 定 委 員 会 | 10月31日(水) | 提言書骨子(案)について |
| 第 2 回 策 定 委 員 会 | 11月29日(木) | 報 告 書 (案) 作 成 |
| 第4回湖南省社会教育委員会議 | 12月10日(月) | 報 告 書 (案) |
| 第 3 回 策 定 委 員 会 | 1月8日(火) | 報 告 書 (案) 検 討 |
| 第5回湖南省社会教育委員会議 | 2月4日(月) | 報 告 書 (案) 再 検 討 |
| 第6回湖南省社会教育委員会議 | 3月10日(月) | 報 告 書 完 成 |
| 湖 南 市 教 育 委 員 会 | 3月10日(月) | 報 告 書 提 出 |

●第1回社会教育委員会議 平成19年(2007年) 5月7日(月)

平成18年度市社会教育委員会議テーマ

「まち全体で子どもを育てる環境づくり」

次年度検討課題 就園前の子を持つ親 OR 思春期の中学生を持つ親



平成19年度市社会教育委員会議テーマ

「就園前の子を持つ親の力・意識を高めるためには」に決定

●第2回社会教育委員会議 平成19年(2007年) 6月18日(月)

① 既存資料からの考察

「湖南省次世代育成支援計画」5. 子育て支援に関するアンケート調査の結果、「湖南省地域福祉計画」に関わる既存アンケート調査結果などをみての現状把握と考察を行った。

② 親学習プログラムについての検討

大阪府、栃木県の親学習プログラムの内容を検討し、親力の向上へのツールとして検討した。

③ 就園までの子育て支援の現状について学習

湖南省子育て支援センター所長平井幸さんに話題提供してもらい、湖南省の子育て事情について学習した。

- ④ 「就園前の親の力・意識を高めるためにどうすればよいか」について2グループに分かれ検討した。

●第3回社会教育委員会議 平成19年(2007年)10月10日(水)

- ① 前回討議から事前シート、討議シートを作成し、2グループに分かれ検討した。
- ② 提言書策定のため策定委員会委員を選出した。

●第4回社会教育委員会議 平成19年(2007年)12月10日(月)

- ① 策定委員会提言書(案)作成にかかる経過報告を行った。
- ② 提言書から報告書への変更を決定した。
- ③ 内容について審議した。

●第5回社会教育委員会議 平成20年(2008年)2月4日(月)

- ① 策定委員会報告書(案)について審議を行った。
- ② 次年度へ向けての方針等について協議した。

●第6回社会教育委員会議 平成20年(2008年)3月10日(月)

- ① 報告書(最終案)について審議を行った。
- ② 次年度へ向けての方針等について協議した。